



尾崎 正弘

OZAKI Masahiro

教授 経営情報学部経営情報学科 専門分野 ヒューマン・コミュニケーション科学、情報
【学位】博士(工学)(名古屋工業大学) 価値論、情報科学(Software)、教育工
【学歴】慶應義塾大学文学部 学、複合・共感覚システム、人間工学

- 研究テーマ
- (1) コンピュータを活用したコミュニケーション支援および教育支援全般
 - (2) 情報の価値と連鎖性を中心とした効率的なシステムの設計・開発
 - (3) 共感覚および複合感覚によるコミュニケーション支援および業務改革

研究紹介

Computer & Human Communication with Creative Thinking

透明性(transparency)を重視したシステムの設計・開発

情報技術の爆発的な進化により、情報関連(ハードウェア、ソフトウェア)の価格は飛躍的に安くなり、その意味では情報技術の進化は円熟期に入ってきた。コンピュータ関連機器の性能的な比較では20年前20-100億円程度のものが、今日では20-100万円程度と格段に安くなった。

すべての企業で、社員がコンピュータやインターネットを活用して業務を行っており、商品販売から在庫管理、ビジネスの商談、契約に至る過程でコンピュータを活用している。商談ではメール等を活用し、契約の文章などもコンピュータで作成するなど、いまや企業活動の中で行われているビジネス・コミュニケーションのほとんどがコンピュータに記録されている。

近年、世界的な企業競争の中、企業は自社の利益追求に必死となり、利益追求に専念するあまり企業の偽装問題が多く発覚し、それが社会問題化して複数の企業が倒産した。今後、コンピュータの記録容量がT(Tera: 1,000G)バイトからP(Peta:1,000T)バイトに飛躍的に拡大することから、近い将来において企業活動の多くの情報が記録可能となり、それらの可視化情報から特定企業の活動を再現できるようになる可能性がある。その結果、企業の把握し難いような反社会的な行為において社会的に大きなダメージを企業が受ける可能性もある。今後、社内情報と社外情報に仕分けされた情報の透明性(transparency)を確保することが企業として必要な要件として重要になってくる。

情報的価値連鎖(Information Value Chain)

今まで情報システムは、開発と維持管理に多額のコストを伴うもの、企業にとって「経費の掛かる金食い虫」であるとの印象を与えてきた。しかし、情報は企業にとって非常に価値(=資産)あるものであり、企業資産となるべき「価値ある情報」も非常に多く含まれている。しかし、現状の情報システムがその運用面を含めて「情報の価値」を生み出すような仕組みになっているのだろうか甚だ疑問である。

最も効率の悪い企業では、情報システムが生み出した膨大な「価値ある情報」を多大な費用を掛けてコンピュータの中にただ蓄積し続け、さらに情報セキュリティを保持するために多くにコストを費やして永久保存し続けている。情報システムは、今まで優れた情報システムの開発することを第一に考えられてきたが、情報機器の飛躍的な技術開発に伴い、これからは「情報の価値」を生み出すことを最優先に考えるべきである。

今後、情報システムの開発を計画する場合は、第一に「最適な情報価値を伴う選択」、第二に「適時・適切な情報価値の維持管理」、第三に「変動する情報価値に適応した情報システムの開発」が必要となる。「価値ある情報」はさらにその価値を高め、「消費期限の切れた情報」や「価値のない情報」は速やかに削除するなど、「情報の価値連鎖」を主体としたシステム設計・開発方法を採用することが求められる。